

蹴られる

sanukisoba

「おつかれさま」と言い残し、まだ2人の職員が残っている事務室を出る。省エネの名の下に照明を半分消された廊下を1人ヒールの音を響かせながら進み、建物の突き当たりにあるロッカールームのドアを開ける。部屋の真ん中くらいにある自分のロッカーの鍵を開け取り出したハンドバッグに財布をしまう。あわせて携帯の着信を確認すると高校時代の友人からメールが届いていた。そのうち食事でも行こうというお誘い。「元気？ご飯行こうよ」としか書いてないメールは簡にして要を得た可愛げのないものだが、私たちにはそれで充分。

彼女はお互いが就職してからもう年に一度くらいのペースで会っていた親友とも言うべき存在で、2ヶ月くらい前に友人が私の職場の近くに転勤になった頃からそのうち帰りに食事をしようよという話を何度かメールでしていた。こうしてお誘いがきたということは向こうも職場に馴れてようやくそれだけの余裕ができてきたということなのだろう。金曜夜なら毎週確実にだよと返事を送って、ロッカーからコートを取り出し部屋を後にする。例え用事がなく毎週ただ家に帰るだけではあるとしても金曜だけは常に定時で帰ることにしている。それは見栄みたいなものだから、数ヶ月ぶりにさみしくない金曜の夜を迎えられるのかもしれないと思うと少し気分がよくなる。

玄関先の警備員さんに挨拶をして外に出ると、これから冬を迎えようとするだけあって18時ちょっと前に歩く帰り道の空はもうすっかり真っ暗。駅に向かう途中の階段では足下に目を凝らさなければ転んでしまいそうだった。つまらなそうにしている野良猫に見送られて私は階段を降りきり、足早に駅へと向かう。ハンドバッグからスムーズに定期を取り出せたというのに、ホームに着いたときちょうど電車が発車していった。

去って行く電車の赤い灯を眺めながらホームをぼんやりと歩く。肌寒い風がコートの襟を叩き、裾がはためく。ホームの端から端まで歩き切ると、反対側のホームを通過電車が轟音と共に駆け抜ける。ホームに置き去りにされる私は襟元のボタンをしめてホームに佇む。部活帰り的高校生たちに囲まれ賑やかな雰囲気の中あくびをかみ殺しながらまだかな、と思い始めた頃滑り込んできた電車に乗る。賑やかな集団に気圧されたわけではないけれど、最後に乗り込むことになってしまい車内ではドアの前に立つ。高校生達が作り上げる喧噪に満ちた車内で何気なく触れた鞆の留め金はとても冷たい。

窓の外の景色と窓に映る自分の姿のどちらを見るでもなく立っているうちに、電車は目的地に着く。留め金が私の体温で暖められるには充分だけど、車内の熱気が窓を曇らせるには充分じゃなかった程度の時間。吐き出された人たちとともに山手線のホームへ進む。何も考えず流れに乗って歩けるこの駅での乗り換えはいつも楽。すべての駅がこれくらい流れがしっかり作られていればいいのに、私の願いなんて叶ったためしがない。

賑やかさには乏しい代わりにそれなりに窮屈な山手線に連れてこられた池袋でまたしても乗り換える。山手線に比べればゆとりのある車内で眺めていた中吊りを読み終えたタイミングで恋人からメールが届く。今日も研究室にこもるから電話はできそうにないというそっけないメール。かれこれ1週間くらい私たちは一日一往復のメールだけしかしていない。中吊りにあるような魅惑的で官能的な関係性も、私たちの間には存在しない。それは私も恋人もそういうものを望んでいないからなのだが、人に言わせればそれは風変わりらしい。

後ろに立つ人に肘が当たらないよう気を配りながら「了解」と手早くメールを返す。一応日曜日には会う予定になっているのだが、それもどうか今の段階ではわからない。私はどうせ暇だけど、幸せなことに恋人はそれなりに忙しい。中吊りも読み終えてしまっていたので、届いていたメールマガジンやツイッターを眺めているうちに電車は最寄り駅に到着する。ホームに置いてある鏡に一瞬うつった自分の顔を見たとき、唐突に私は自分が歳をとったということを強く意識する。考えてみれば母が私の年齢のとき、私は既に2歳になっていた。今の私の年齢は、私が生まれたときの父の年齢だ。いつの間にこんなところにまで来てしまったのだろう。家までの5分くらいの距離をそんなことを考えながら歩く。私に断りもなく進んでいく時間がすこし邪魔に思える。

省エネに歯向かうかのように煌々と明かりをともした家の中で食事をして、本を読んで、お風呂に入り、布団に入る。帰宅してから一度も見なかった携帯をもう一度確認すると、高校の友人から返事が来ていた。今週か来週の金曜はどうだろうという内容。今日は水曜日だから明後日というのも急な話だけど、特に予定もないし来週になれば来週になったで都合が悪くなるかもしれないから今週会おうと返事をする。そして私は彼女からの返事を待つことなく、眠りにつく。23時就寝、6時起き。かすかに携帯が鳴ったような記憶はあるけれど、それは定かではない。

\*\*\*

段取りの下手な後輩のおかげで3時間ほど残業をした木曜日を経て、約束の金曜日。中途半端に残った仕事を来週に持ち越すことに決めた私は約束の5分前に新宿駅に着く。週末19時の新宿はいつ来ても変わることはない賑わいで、就職を機に山形から出てきた同期の子が歓迎会の夜に「東京って毎日がお祭りのようだって祖父が言ってて、嘘ばかりって思ってたんですけど、大げさな話じゃなかったんですね」とため息をつきながら呟いたのをいつも私に思い出させる。高校の頃から遊ぶときは新宿だった私からすると特に目新しい街ではないけれど、きっと見慣れない人からすればとても不思議な空間なのだろう。その同期は結婚して退職してしまっただけで、あの時のため息は何故か印象に残っている。馴れというのは恐ろしい。

カップルや学生の集団に囲まれながら友人を待っていると、後ろから肩を叩かれる。振り返ればそこには友人がいて、いつもと変わらないセミロングの髪が軽やかに揺れていた。「どこに行こう」「どこでもいいよ」といういつものやり取りをしながら私たちは目的地も定めず歩き始め、客引きを無視し、騒ぐ学生の横をすり抜け、目についたイタリアンのお店に入る。席に案内する店員のポニーテールが揺れている。

客の入りは8割といった程度の常識的な範囲内にぎやかな雰囲気の中、友人はミモザを頼み、私はジンジャーエールを頼む。食べ物はピザが1枚とパスタひとつ、それとサラダ。飲み物が届く前に私はアラスカメンソールを取り出し、友人は灰皿を取ってよこす。「やめたんだっけ？」とタバコを啜えながら尋ねる私に「たまには吸うよ」と返してきたので私は箱を渡し、自分のタバコに火をつけてから友人にライターを渡す。お互い主に仕事の近況を簡潔に説明し、届いた飲み物で乾杯をする。そこからさらに最近の出来事を伝える。近況報告とはまた違う、ちょっと面白い話。そんな他愛無い話を30分ほど。テーブルの上は料理で満たされる。

「ところで」

とグラスをおいた友人が切り出す。

「結婚」

と私もグラスを置いて切り返す。

「そう」

「おめでとう」

「私もとうとうだよ」

「今年30だもんね」

「あんたは相変わらず？」

「そうだね」

私はジンジャーエールに刺さっている邪魔なストローを取り出して友人の空のグラスに入れると、乾杯の仕草をしてグラスから直にジンジャーエールをあおる。友人も空のグラスで乾杯の仕草をする。氷が私の唇にあたり、口紅がグラスに残る。あまりスマートではないな、とぼんやりと考える。

「どうして結婚するってわかったの」

グラスの口紅がついた部分を角度を変えたりしながら眺めつつ「なんとなく」と答える。なんとなく、今日待ち合わせ場所を見た瞬間から友人は結婚が決まったんだなと私にはわかっていた。雰囲気か表情かはわからないけれど、私にはそういうことがわかる。私のその答えで納得するかどうかはわからないが、それについて追及されることを避けるため私は質問で返す。

「いつプロポーズされたの」という尋ねに、あなたが説明を拒んだことはわかったわよという具合に友人は頭を左右に揺すり「2週間前」と答える。そして私が質問を重ねる前に一通りのことを教えてくれる。両親への挨拶が来週末だとか籍を入れるのは半年くらい先の予定とか結婚式は来年くらいに挙げるとかを要領良く。どうでもいい、と私が思うような内容を話すことは決してなく、こちらが聞きたいような内容だけを的確に語る友人を見ていると、伊達に人生の半分以上の時間を友人として接してはいないなと感心してしまう。ピザを取り分けながら、ピザを頼張りながら、相槌をうち感想を述べる。サラダはいつの間にか2人で食べてしまっていた。クルトンがひとかけらだけ皿に残されている。

「で、あんたはどうすんの。彼まだ学生だっけ」

「そう」

答えながら取り分けたパスタは少しパサついていて、自分がちょっと顔をしかめたのが自分でもわかる。

「同い年だっけ」

私が顔をしかめたのに気付かないのか、それとも顔をしかめたのはパスタのせいだというのがわかっているのか、友人は気にせず質問を重ねる。ただ、間違いなく、後者。

「1個下。文学部出た後何故か理学部の数学科に入り直して今M1。D進するかは微妙なところ」

「じゃあどんなに頑張っても結婚は当分、先か。でもその人と結婚考えてるんでしょ」

「一応はね。向こうもそのつもりみただけ。でもとりあえずなんとか将来が見えてこない結婚はないよね」

「あんたが稼いで養っていけば」

「別にそういうのを否定するわけじゃないけれど、私自身が絶対に結婚したいってわけでもないし、タイミングがくればするかもしれないけど」

「そういうもんかもね。それにその彼とうまういかなかったとしても、あんたそれなりにモテそうだからなんとかかなるでしょ」

「そういう問題じゃないよ」

友人がミモザをおかわりして私はウーロン茶を注文する。皿に半分ほど残っている生ハムのピザを手取る。一切れを持ち上げると、ピースの先にあるチーズが残りのピザに引っ張られて皿の上に残されてしまう。私は気にせずその一切れを口に運ぶ。冷めたピザは中途半端に満たされた胃袋を刺激し、急に食欲が増す。食欲に忠実な私はパスタを取り分ける。友人の皿にも。友人はありがとうという言葉のリスタートの合図にして再び話し始める。

「あんた、変わってるよね。私なんて30だけは超えたくないって結構必死になったのに。その結果が今回の結婚だよ」

「そういう人もいるってだけの話でしょ。それと、今回の結婚とか言って、次の結婚があっても私は御祝儀だせないからね」

「あんたらしいよ。焦りがないってのはうらやましい」

4本目のタバコに火をつけて私はやんわりと否定する。焦りはないわけじゃない、と。でもおそろしく、私の感じている焦りと、友人の言っている焦りは少し違う。

「私だって焦りはあるよ。もちろん。ただ、結婚しなきゃって焦りじゃないだけで、私は周りの友人たちや同僚が自分と違うテンポで人生を歩んでいることに焦りを覚えるの。自分だけぼっかり置いていかれているようでたまに不安になる」

「わかる気はするけれど多分しっかりわかってはないと思う。でも、それでも今すぐ誰かと結婚して追いつこうとは思わないでしょ」

「うん」

「それじゃあ、そこまで焦ってるとは、きっと、世間的には言わない」

「それは否定しないよ」

アラスカメンソールの唯一の欠点である、クセのある厭な残り香が灰皿の周りに漂って私の顔がゆがむ。

「まあ、私のことはいいのよ。おめでとう。こうやって気兼ねなく呼び出せる友達が減るのは寂しいけど、結婚式は呼んで。二次会だけの方が個人的には嬉しいけど」

「悪いけど、披露宴から出てもらうつもり」

「もう少し幸せそうに言いなよ。結婚だよ」

笑いながら言う

「そんな歳でもないし、もっと戦略的で現実的なものだよ。結婚って」

真顔で返される。そんな歳でもない、というのは真実なのだろうけど置き去りにされる私にとって真実というのは凶器に似ている。

「二次会も呼んでくれたら色々暴露話してあげるから」

「それじゃあ二次会は呼ばないことにする」

「なら披露宴で暴露するだけの話」

「それはそれで楽しそうだけどね」

氷が溶けて水割りになってしまったウーロン茶を一気に飲み干し、私はタバコを啜って火をつけてから友人に箱とライターを渡す。

「余興とかはやめてね。ああいうの苦手なの」

「知ってるよ。奈緒の結婚式で私たちが『余興やるくらいならいかない!』と最後まで交渉して大学の同期に余興やらせたんじゃない」

友人は手慣れた手つきでタバコを取り出し、器用にもタバコを啜って火をつけながら私と会話を

する。「そういえばそうだったね。奈緒もいつの間にか母親になってるけど」

「もう3歳だっけ。早いよね。置いてかれた感じ」

結婚が決まった人間とは思えないくらい色気のない仕草で灰皿に灰を落とす。

「その置いてかれた感じが私の焦りの感覚につながっていくんだよ」

たった数本の吸い殻でいっぱいになってしまっている灰皿が何故か急に気になり出して、私は隣の空きテーブルから灰皿を失敬する。ドトールじゃないんだからこんなに小さな灰皿にする必要もないのに。灰皿を手を持ったまま灰を落とし、軽くため息をつく。友人はきっと、聞こえないふりをした。灰皿を机の友人と私の真ん中あたりに置く。

友人が結婚して幸せになっていくのはとても嬉しいし私も幸せな気分になれる。でも、それはどこか寂しくもあり、私を焦らせもするのだ。他人の幸せで味わえる幸せな気分と、自分が幸せになって味わえる幸せな気分というのは、不安がないという点でまったくの別物。前者で満足しているうちにいつの間にか私はこんなところへ来てしまったのかもしれない。

会計を済ませて店を出る。22時も近くなった新宿はまだまだ賑やかでガサツ。翌日にフィアンセと予定があるという友人を丸ノ内線の改札で見送って、私はどうしようかと悩む。このまま帰るのもどこかつまらないし、かといって女独りで22時にどこかに入るといってもあまり色気がない。喫茶店にでも入ろうかと思ったが、どうせコーヒーとタバコを消費するだけなのに喫茶店に入るといっても金曜夜の過ごし方としてはどこか寂しい。

東口の出口から一度地上に出て南口までの道をもやもやとした思いを抱えながら歩いてはみたけれど、特に何かをしたいとも思えなかった私は結局南口改札をくぐり帰路につく。定期券を鞆にしまうとき、右手の指環がホームの照明をうけて鈍く輝いた。

結局その日は帰宅後すぐに寝てしまい、土曜日は家事で消化し、日曜日には2週間ぶりに恋人と会った。友人が結婚するという話を何故かできないまま、私は恋人とランチを一緒に食べ、私の買い物に付き合ってもらおうというだけのいつもと代わり映えのしないデートに終始した。

結婚の話をできなかった理由はよくわからない。心理的な負担を負わせたくないのかもしれないし、友人の結婚の話と向き合うことで自分が焦りをより一層強く感じることを避けたかったのかもしれない。いずれにせよ臆病な私は、友人の結婚の話をする事なく、私たちの将来についてちょっとした探りを入れることもなく、ただただいつもと同じことしかできなかった。恋人といえる時間はとても楽しいし、幸せでもあるのに、どこかなにか不安を残す。

結婚を是が非でもしたいというわけではない。私の中にあるのは、取り残されていくような不

安だけ。他人と違うことに恐怖するほど幼くもないけれど、他人と同じことができないというのは自分が幼いからなのではないかと不安になることもある。

日曜の夜、なかなか寝付けないままいつもより2時間遅く布団に入った私はどこか憂鬱な一週間の幕開けを迎える。しかし、私がどんなに憂鬱な気分であろうと、不安を抱えていようと、世の中には何も影響がないらしく、淡々と毎日は続いていく。仕事はいつも通りだし、仕事から帰っても食事と読書と睡眠だけというのもいつも通りだし、恋人の忙しさもいつも通り。週末も家事かデートか読書に費やされるし、私の作る食事のラインアップに煮物が増えることもない。淡々と続く毎日の中で不安は霧散し、憂鬱さは別の感情に席を奪われる。憂鬱さでさえ居場所を確立できない私は友人から結婚を報告された日から何も変化を感じられないまま、変化を起こさないまま、12月の下旬へとたどり着く。

平日は仕事、たまに残業。帰宅してからの入浴と読書と食事。たまにかかってくる実家からの電話。思いつきで買った雑誌、悩んだ末に入手した4冊組の小説、唐突に食べたくなって買って帰ったけれど半分も食べたあたりで飽きてしまって持て余すポテトチップス。そして恋人とデートする週末。すべてが去年の今頃と同じですべてが今年過ごした毎月と同じ。変化なんて何もない。

。

\*\*\*

もちろん私だってクリスマスは迎えたけれど、クリスマスだからといって特に恋人と何をするわけでもなくただ食事をしてプレゼントを交換してその日を終えた。恋人は相も変わらず研究に忙しかったし、私は私で年末年始に電車でたった30分先の実家に帰省する都合で冷蔵庫の中身をどういう順序で消化していこうかという問題の解決に忙しかった。すると当然いつも通りのデートで終わってしまうので、結婚だのなんだのといった応用問題については姐上にすら上らない。クリスマス当日は定時後1時間くらい残業をしていたし、クリスマスの翌日だって定刻通りに出社をする模範社員だ。

そんなクリスマス翌日の勤務終了後、残り100gぐらいあるコーヒー豆は今年中に飲んでしまわないと香りがとんでしまう、でも3日で100g消費するとなるとすこし大変だ、などと思いながらロッカールームのドアを開けたところ珍しく同期の子がそこにはいた。

いわゆる男性が思うOLの理想像に近いファッションとヘアスタイル、化粧を身にまとういかにもモテそうな同期のその子は、事実入社当時から男性社員からの人気を集めており、20代も残り1年を切った今に至っても新規入社的女性社員よりモテている。さすがにこの歳にもなれば「未だに結婚できないなんて何かあるんじゃないの」などと男女問わず陰口をたたかれる機会こそ増えたけれど、まず間違いなくこの会社のマドンナ的な存在ではある。同じ女性の私から見ても感心するくらい彼女は周りを圧倒する雰囲気や常に醸し出している。

一方でそういった雰囲気とは無縁の私は、もちろん彼女とそこまで仲が良いわけでもなくたまに廊下ですれ違ったときに情報交換をするくらいでプライベートでのおつきあいは一切ない。過去に何度か男性社員から彼女を紹介してくれと頼まれたことはあるが、私たちの間の微妙な距離を察してくれたのか最近はその回数も減った。私が使えないと認定されたのか彼女の人気は若干衰えたのか。いずれにせよこうしてロッカールームのような逃げ場のない場所で2人きりになるととても憂鬱。トイレに寄ってからロッカーにすれば良かった。

そうはいつても一応は「同期」であるので、挨拶ぐらいはする。久しぶりね、最近どう、といった話をしているうちに年末年始の話になる。急にプライベートな話を振ってきたあたりで私は非常に嫌な予感を覚える。実家に帰るといことを告げると彼女は何事もないといった口ぶり。「私は彼氏の実家に顔を出すことになった」と宣告する。こうなってしまうと私が質問をしようがしまいが自分の語りたことを相手は語り出すということくらい、私は知っている。無神経に30近くなっていないし、無駄に何度も結婚報告なんてうけていない。

結婚が決まった話や結婚後しばらくは職場に残るけれどその先はわからないという話や、彼が転職のある職場だからそのタイミングが不安だという話やそういったどうでもいいなんやかんやを一通り彼女は伝えてくれる。勤務後のロッカールームで、寒い中私は突っ立ったまま彼女の結婚報告を聞かされている。これはもう暴力、ボコボコに殴られてる感じ、誰か入ってきてタオル投げてくれないかななんて考えているうちに彼女は攻撃の手を緩め始め、左腕の内側を向いている華奢な腕時計を見て「あ！ごめん！この後用事があるの忘れてた」と嬉しそうに言ってからヒールの音を高らかに響かせながらロッカールームから出て行った。

腕時計を見るのと同時に左手の指環を見せつけ、恐らく昨日プレゼントしてもらったばかりであろう可愛らしいコートをはきながらロッカーから出て行く彼女。試合の最後の最後で回し蹴りを喰らったようなもので、私は気分的にはもう早くリングからおりたかった。最悪。ここまでやさぐれさせてくれれば100gのコーヒー豆なんて1日で消化できそう。ため息とイライラをロッカーに押し込むようにして職場を出る。私も結婚が決まったりしたらあんな風に笑顔で人を殴れるようになるのだろうか。仕付け糸も外せなくとも幸せの絶頂に達すれば、あれほどまでの攻撃力を獲得できるのだろうか。

これで、同期の間で結婚していない女性社員は私だけになった。どんどんその手の話題が私の周りではタブーになっていくのだろう。まして彼女の結婚が決まった以上「あの子ですら独身なんだから」という周りの自制心とでも言うべきブレーキはもう望めない。そんな被害妄想じみた

考えにとらわれてしまう。実際のところはそんなこともなく、私が独身か既婚かどうかなんて多分彼らは興味を持たないだろうけれど、でも何かのときに「そういえばあの子結婚まだだよ」と思われるのだろう。冷え切ったロッカールームでため息を我慢しながら身支度を整える。一昨年買ったコートの袖は冷たく、身震いとともにはドアを開けると、耐えきれなかった私はため息を残す。

見守るネコもない道を歩き、風に吹かれながら待っていたホームに電車が到着する直前、携帯が震える。中学時代の同級生から電話の着信。無視しようかとも思ったが、とりあえず出ることにした。

「もしもし」

「もしもし？久しぶり。今大丈夫？」

「大丈夫だよ。どした」

目の前で電車のドアが閉まる。

「いや、同窓会を計画してるんだけど、どうかなあと思って」

「いつ」

「1月の4日とかどうだろう」

私が実家から帰ってくる予定なのは3日。仕事は6日から。日程的には何も問題はない。日程的には。私はホームから出て行く電車を見送りながら「確認してあとでメールするね」とだけ伝えて電話を切った。

ホームの人間を電車が攫ってってしまった中、私だけがホームに取り残されていた。半年ぶりくらいに声を聞かせてくれた同級生は去年結婚したばかり。少しずつ独身の同い年がマイノリティになっていた。

\*\*\*

浴びるようにコーヒーを飲んで迎えた年末。

実家で友人の結婚を報告したところ母親からは心配をされるし父親からも大丈夫なのかと言われる年始。

私が露骨に不愉快さを示したために結婚の話は一切しない流れになった。ある程度の歳になると結婚の話はタブーと言われるのは、周りの気遣いだけじゃなく実際に言われる本人が周りにそうした話をさせないからというのかもしれない。多分両親は「心配しているだけなのにこの子は不愉快になる……」と半ば呆れているのだろう。双方にすこしだけ嫌な思いを残して三が日を終えていた。ラグビーも駅伝もぼんやり眺めてはいたけれど結果もろくに覚えてはいないし、特に何かをしたわけでもなく、土日が3回くらい続いて、かつ、彼と会わなかった程度の年末年始となってしまった。

実家にいる間、ふとしたタイミングで中学の同窓会に行くという話を母にしたところ「今までそんなの行ったことあったっけ」と母が尋ねてきた。たしかに、中学卒業から今に至るまで私は中学校時代の知人との接点をほぼ持たずにきた。同じ高校に進学した同級生が独りもいなかったということもあるし、その中学校を卒業した生徒のほとんどが通う方向と逆の方向にある高校に進学をしたことも理由のひとつだろう。言われてみればそんな状態なのに中学校の同窓会に参加するなんておかしい判断をしたのかもしれない。今となってはどんな人たちがいたか顔も名前も思い出せない。唯一覚えているのは連絡をしてきた子くらいだ。

大量のおみやげを持たされて昼過ぎに実家を出た3日の夜、こんななら同窓会に参加するなんて返事するんじゃないかな、などと思いながら家で風呂に浸かっているうちに、色々なことが面倒くさくなってきてしまう。風呂に入る前に彼と電話をしたけれど、実家に帰っている彼は彼で色々嫌な思いをしているらしくあまり元気がなさそうだった。言葉少なに電話を切った後すぐに風呂に入ったので今もまだ心配する気持ちが強いけれど、私は私で嫌な思いをしているのだからお互い自分で解決するべきだ、とめんどくさがりに変貌した私は勝手に思い込むことにして、風呂を出た。いそいそと潜り込んだ布団はとても冷たく、布団が暖まった実感を持つ前に私は眠ってしまった。

翌朝、気持ちよく晴れた天気とはうらはらに起きた瞬間からどことなく憂鬱だった。8時くらいに布団から抜け出し、出掛ける準備をする。同窓会は夜だけど、家には今食料がほとんどゼロなのでランチをとるついでに出掛けてしまうことにした。実家でもたされたおみやげはとてもじゃないがご飯になんてならない。もちろん、佃煮だけで満足にご飯を食べる人を否定するわけではないが私はそういう人ではない。そして同窓会は新宿。またしても新宿。

11時過ぎに家を出て、30分くらいかけて池袋に着く。前から気になっていたスペイン料理の店でランチを済ませてから本屋巡りを開始する。年末にボーナスが出たけれど特に大きな買い物もしておらずほぼ満額貯金に回してしまっていたので軍資金は存分にある。まとまった額購入すると無料で配送してくれる店で物色して15冊ほどの本をレジカウンターに持っていく。カードで支払いを済ませ、配送の手配を済ませる頃には15時を回っていた。配送に回してもらわず1冊だけ持ち帰ることにした本を手に出る。

三が日あけとはいえず土曜日なので街には人が溢れていた。同窓会の時間までどこかの喫茶店で過ごそうと思っていた私は、土日の池袋でも比較的空いている喫茶店を目指して歩き始める。途中のコンビニでタバコを買い、まだ売っているらしい福袋を抱えた人や、疲れて寝てしまった娘を抱きかかえている父親を追い越したりすれ違ったり。街は明るく健全。

1月4日、繁華街のちょっと離れたところにある喫茶店の喫煙席。独りの客は私の他にはおじさんかお兄さん、おじいちゃんくらいで私くらいの年代どころか、そもそも女性単体というのは私くらいしかいなかった。来ている女性客のほとんどは女性同士もしくは家族、恋人、友人と一緒に。そんなもんだよね、ということくらいわかっているつもりではあるけれどこうしてビジュアルとして眼前に突きつけられると少し戸惑う。

ココアとタバコを順調に消費しながら、買ったばかりの文庫のページを繰る。ストーリーは面白いのだが、この後に控える同窓会がちらついて本に集中できない。ほんとなんで私は同窓会に行くなんて選択をしてしまったのだろう。しおりも挟まず本を閉じ、タバコに火をつける。すでに灰皿には6本の吸い殻がたまっているけれど、灰皿には十分なスペースが残されている。

ため息ともつかない吐息で煙を吐き出す。細く長く。私は一体ここで何をしているのだろう。体調が悪いと言ってキャンセルの連絡を入れて帰ってしまえばそれで済むだけの話だということに。律儀な自分に感心しつつ、でもぎっとどこか皆の姿を見てみたいという願望があるのだろうと自分を分析する。分析したところでなんにもならないのだけど、私はこういうつまらないことばかり考える。その辺は中学の頃からなにも変わらない。

店内の客を眺めたり、携帯でネットを見たり、タバコを吸ったりしているうちに18時近くなり、店を出て池袋のデパートに向かう。化粧室に寄ってから山手線に乗り込む。新宿に着くまでの間、私は携帯も本も見ずただぼーとしていた。端から見たらだらしない表情をしていたかもしれない。携帯にさしたモバイルバッテリーがバッグの中で発熱しているのがよくわかる。バッテリーの温もりを革越しに受け取りながら賑やかな車内で静かに呼吸をする。

池袋から新宿に向かう山手線、天気がよくてすれ違う電車さえなければ一瞬だけ綺麗に見えるスカイツリーもこの時間では見つけることができない。ましてや一瞬だけ見えるそのスポットで電車とすれ違っては見ることは不可能だ。

すれ違う電車に視界を塞がれた瞬間に、私はため息をつく。電車は常に次の駅を目指す。

\*\*\*

会場の店はすぐに見つかった。新宿で遊び始めて15年にもなってしまえば家の近所となんらかわりはない。店員に幹事の名前を告げて案内をしてもらう。靴を脱ぐ席だと嫌だな、と混雑した店内を歩きながら思う。例え靴を脱がないとしてもブーツを履いてきたのは明らかに間違いだった。そういう先読みがどんどんできなくなっている。さらに、客層は比較的若めで、どうしてこんな店にしたのだろうという疑問が生じるくらいには30近い客が似合うお店ではない。

「こちらになります」

パーテーションで区切られた一角に店員に促されて入ると私の動きは止まる。

目の前には大体十数人が既に集まっていて、私は最後に到着したようだった。

果然と立ち尽くす私の前に私と同じくらいの身長的女性が現れる。「ひさしぶり。誰だかわかる」と妙に陽気に話しかけられ、一瞬でその人の名前を思い出し口に出す。わかってくれた、とまた妙にはしゃいで私の席を指で指し示す。向こうはなんで私のことを覚えているんだろう、と思ったけれど考えてみたら最後に来たのが私だもの、みんな私が誰だかわかって当然なのだ。

指示された席は部屋の一番隅の席で、私はその席から部屋全体を見渡し言葉を失う。誰が誰だかわからない。そして飲み物も運ばれていないのに異様にみんな盛り上がっている。またしても私は取り残されてしまったようだ。

もう一度落ちて周りを見渡せば、何人かは名前が思い浮かぶ。かつての面影を残している。座っている人を1人ずつ眺めているとむかひの席の男性から話しかけられる。

「久しぶり。元気そうじゃない」

「あ、うん」

「誰が誰だかわかる」

「いや、なんとなくだけど少しだけ」

「中学校以来だもんね。何してたの」

私はあなたが誰だかわからないの。ちょっと待って、と矢継ぎ早な質問に困惑しているとその隣に座った女性が「ちょっと落ち着きなよ」と助け舟を出す。この女性は誰だかわかる。私と同じ部活にいた人だ。そう、落ち着いてほしい。私はブーツを脱がずに済んだことにとりあえず安堵しているのだ。その安堵感を少しは味わいたい。

「ちょっとまってね、来たばかりでまだ状況が飲み込めない」

そう言い訳をして自分のペースを取り戻す。

「今日は何人くるの。私が最後だったのかな」

「そうだよ」

と目の前の男性。

「たしか全部で15人のはず」

とその隣の女性。クラスは40人弱いたから、半分に満たないくらいの出席者がくるようだ。それが

多いのか少ないのかはわからないけれど、少なくともなつかしさと高揚感で全てが肯定的に捉えられる彼女たちはこんなに集まったと大騒ぎしている。もう一度全体を見回して名前を思い出そうとしているうちに飲み物が運ばれてくる。例によって私が頼んだものはジンジャーエール、一口すするとそれはカナダドライでがっかりする。

酒が満遍なく回り座がより一層盛り上がり始めると私のような卒業後音信不通だった人間は興味の対象からはずれ、卒業後も肅々と連絡を取ったり交遊を続けてたりしていた者同士で会話が弾む。一人放置されたような形になってしまった私だが、彼らの会話を聞いていると大体のところがわかりはじめる。本日参加の女性は9人、男性が6人。女性のうち未婚は私を含めて3人で既婚者6人中3人が子持ち。男性は3人が既婚者で子持ちはゼロ。既婚率が異様に高いような気がしたが、どうやらあの中学の他のクラスも似たようなものらしい。未婚女性のうち1人は婚約しており、結婚の気配がゼロなのは私ともう1人くらい。

親となった既婚者が子育ての悩みや子供の可愛さを語り、その親子と親しい人が合いの手をいれ、親となっていない既婚者が家族計画を語り、場がさらに盛り上がる。家族計画の披露なんて避妊しないセックス計画の暴露に等しいように私は思うのだが、皆真面目に語っている。そう、貴方は今年の夏にセックスに励むのねと内心にとどめながらストローでグラス内の氷をかき回す。真面目そうな顔をして、男性器なんて見たこともないみたいな顔をして、彼女たちはセックスをしている。その生々しさが私には耐えられない。やめてくれ、と氷をかき回すペースが早くなる。

やがて婚約をしている子の結婚の話題が中心となっていった、結婚式をどうしようとか、既に結婚式を挙げている女性が体験談を語りつつその結婚式に参加した友人が結婚式の感想を述べ、また、プロポーズの言葉がどうだシチュエーションがどうだ交際期間がどうだ子供がどうだ親がどうだ義理の親がどうだそんな話ばかり繰り返り広げられていて、話題についていけない私は、戦闘機による空中戦を眺めているだけの少年のようだった。恋人が「最近の戦争では空中戦なんて見られないよ。風情がないよな」と豚が飛行機に乗る映画を観た後に言っていたけれど、空中戦なんて日常に転がっている。

私に対する配慮を皆が少しずつ失い始め、それに呼応するかのようによく自分の情報を出さないでいるうちに私は盛り上がる集団からさらに距離を置いた形になってしまう。座席も一番端で物理的にも距離を置きやすい私の周りにはちょっとした空間が生まれる。幸いに、とまでは言わないが気兼ねなく吸えると判断してタバコを取り出して火をつける。話の輪に入らない、いや、入れない私は順調にタバコを消費し灰皿を賑やかに埋めていく。たまに話しかけられ、それに答え、タバコを啜え、また話しかけられ、答え、煙を吸う。そうしたことを繰り返しているうち、斜め前に座っていた女性がトイレに立ち、そこに他の女性が腰を下ろす。そして私に話しかけてくる。

「タバコ吸うんだ。すごいペースじゃない」

「そんなでもないよ」

私は吸い殻の本数を数え、これまでの時間で割り算をして何分に一本消費しているかをざっと計算してそう答える。こんなのたいしたことない。すごいペースというのは一度に2本吸うようなことをいう。プロともなれば一度に一箱くらい吸うだろう。

「あなたは、結婚まだ？」

唐突にそう問われ、身構えてもなかった私は「なんだコイツ」と声に出しそうになり慌てる。

「まだだよ」

「彼氏は」

「いるけど」

「それでもまだなの。いいなあ、なんかそういう時期が」

防御の体勢がとれていない私はあっさり攻撃を許す。

「そうでもないよ。私は私で色々焦ってるって」

「でももう今年30だよ。結婚とかしないでもいいやとかそういうタイプなの」

「そういうわけじゃないよ。タイミングとか、色々ね」

「そうだよねえ。そういう理由がないと独身のわけないもんね。私結婚してるから良いけど独身だったら多分焦ってたと思う」

「わかるわかる、独身で30迎えるのが怖くて結婚した部分あるもん」

突如乱入した別の女からのローキック。

「いいじゃん、結婚できたんだから。今とても幸せでしょ」

「幸せじゃないわけじゃないけど、でもちょっと早まったかなって思うときもあるよ。独身を満喫したかったー！！って」

回し蹴り。

「でもほら、独身でいると周りは結構うるさいし」

精一杯の反撃。「周り」の中にあなたも含まれているんですよ。

「だよ。ほら、やっぱり結婚して一人前っていうか、結婚してようやく大人で、子供生んで育ててないと自立してるって言えないもんね」

「そうかな」

「そうだよ。そういうのが嫌で結婚したところもあるかもだもん」

「そうだよ。やっぱりある程度の歳で結婚してない子供いないってのは色眼鏡で見られるよね」

」  
「もちろんそんな年齢になるのはまだまだ先だけだよ」

「40過ぎて婚歴なしはちょっとね」

目の前で次々と私に向けられる攻撃。私は一言も発することができないまま2人の会話とも攻撃ともつかないやり取りを眺める。出来心で「私はそんな風には考えたくないけど」とほんのちょっとの勇気を出してみる。

「そんなこと言われるのもまだ30になってないからだよ。30後半で初産とか悲惨だよ。まじめに考えた方がいいって」

しかし相手の方が上手で私はあっさりとマットに沈められる。

「じゃあ今の時間って自分が思っている以上に貴重なのかな」

「そう思うけどな、私は」

「じゃあ、自分にとって無駄な時間は過ごさない方がいいのかもね」

「そうだよ、貴重だよ」とのたまう思慮の浅い人達には答えを返さず私は席を立ち、同窓会へ誘う電話を掛けてくれた友人のもとへ向かう。今日はありがとう。でも今度はあなたと2人で会いたいわと言って彼女に5千円を渡す。足りなかったら立て替えておいて後で請求して。余ったらあなたが受け取っておいていつかコーヒーでも奢って。私は帰る。早口で告げ私はコートと荷物を持って店を出る。何人が慌てて話しかけてくる人もいたけれど、それらをすべて無視した。

くるときは特に気にも留めなかったけれど、やはり新宿は新宿らしい人出で、そしていつも通りの明るさだった。無駄に干渉してくることもないし、極端に無関心さを示すこともないし、自分を卑下するようなこともない。さらに謙遜な態度で相手を誘ってノコノコ出てきた相手をボコボコにするようなことも、もちろんない。

東口の喫煙所にたどり着き、タバコに火をつけ、煙を吸い込む。意識的にゆっくりと煙を吐き出しながら周りを見渡す。時間は20時過ぎ。どこかで美味しいラーメンでも食べて帰ろうか。どうせ今頃私のことなんてみんな忘れているだろうし、私もみんなのことを忘れたい。

半分以上残したタバコを灰皿に押し込んで西口にあるお気に入りのラーメン屋へ向けて歩き始める。あらゆる音がかき消されるガード下なのに、自分のヒールの音だけが高く響く気がした。ガードを抜けて交差点に立った瞬間、信号は青に変わる。